

徒然なるままに

JJ1SXA/池

「昨日またかくてありけり 今日もまたかくてありなむ この命なにを齷齪(あくせく) 明日をのみ思ひわづらふ」…これは、島崎藤村の「千曲川旅情の歌」の一節だが、今日この頃の私の偽らざる心境を言っているようだ。

昨日またかくてありけり、今日もまたかくてありなむ…何の変化も進歩も無く毎日が過ぎていく、だが確実に歳はとっていく、老いていくということだ。

更に、もう一つ、唐代の詩人劉希夷の「白頭を悲しむ翁に代わりて」と題する詩の第4節の一部、「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同(ねんねんさいさいはなあいになり さいさいねんねんひとおなじからず)」…「毎年毎年、花は同じように咲くが、人の身は変わって、同じでは無い」というような意味。

正にその通り、今年も昨年と同じように、同じ花は咲くが、私も、1年を経て1歳、歳をとって昨年と同じとはならないと実感する…そんなマイナーな考えは持つまいと思いつつも、折に触れ、そんな考えに捉えられる。

人生100年時代と言われるが、身も心も健全の状態なら結構なことだ、私はまだ、完全な認知症までにはなっていないような気がするが、他人に判定してもらわないと、人間身勝手、自分に都合の良い方に考えるのが常だ、自分では大丈夫と思っても、他人から見たらとんでもないということも多い、それでも、他人は、悪いことは正直に教えてはくれない、ここは身内の判定に任せるしか無いか…

と、書いたところで筆が止まっていたが、テレビを見て題材が浮かんできた、番組は、織田信長が桶狭間で今川義元の大軍を破り、義元を討ち取って大勝利を収めた時の有名な物語の番組だった、そして、出陣前の信長が能を舞う姿は皆様ご存じの事でしょう、この時謡っていたのが、「幸若舞(こうわかまい)」の演目「敦盛(あつもり)」の一節で、歌詞は以下の通り。(詳しくは、今度知った)

思へばこの世は常の住み家にあらず
草葉に置く白露、水に宿る月よりなほあやし
金谷に花を詠じ、榮花は先立つて無常の風に誘はるる
南楼の月を弄ぶ輩も 月に先立つて有為の雲にかくれり
人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり
一度生を享け、滅せぬもののあるべきか
これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ

此の後半の意味は、「天の上の上に第五番目の天とよばれる下天(化天)というものがある、そこでは、この世の800日が一日、この世の人間の寿命は50年ほどだ。

思えば人間の一生は、ほんの一瞬、まるで夢か幻のようなものだ、この世に生まれた者で死なない者はあるはずがない。これを悟りの境地と考えないのは 情けないことだ」と言うことのようにだ。

下天(化天…ゲテン)というのは、仏教の六道(ろくどう／りくどう)のうち、一番上の世界である天道の中で、一番下の世界である四天王衆天を指しているそうですが余り良く理解できない、六道とは、上から順に、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六つの世界を指すとのこと、これで少しわかる気がする、ちなみに、お地蔵さまが6体揃って並んでいるのを見かけるが、この六道の六つの世界に対応しているとのこと。

「幸若舞」の演目「敦盛」の「敦盛」は平敦盛の事であり、一の谷の源平の合戦で、平氏退却となった時に、忘れた愛笛「青葉の笛」を取りに戻ったため逃げ遅れて、源氏の武将・熊谷直実に取り取られたが、直実は、嫡男と同年代の(16歳)若武者敦盛を討ち取ったことで武将の無常を悟り、後に出家することになるが、その時の心情が、一番の歌詞であることを知り、またこれを、織田信長が好んで謡い舞うのは、何に惹かれてなのか、その答えはわからない、信長はどう感じていたのか。

ここで「青葉の笛」のこと、弘法大師が唐へ留学中、長安の青龍寺にある「天竺の竹」から作り上げたこと、日本へ帰国後に嵯峨天皇に献上され、「青葉の笛」と名付けられた。

その後、敦盛の祖父・忠盛が鳥羽院から拝領し、父経盛がそれを受け継いで笛の名手であった息子・敦盛に渡った由緒ある笛。(現在、神戸市須磨区須磨寺町にある須磨寺に保管されているようだ)

「青葉の笛」に関し、もう一つ、文部省唱歌「青葉の笛」(明治39年)は、倍賞千恵子が歌っているので、ご存じか？

一、一の谷の 軍破れ 討たれし 平家の 公達あわれ
暁寒き 須磨の嵐に 聞こえしはこれか 青葉の笛
二、更くる夜半に 門を敲き わが師に託せし 言の葉あわれ
今わの際まで 持ちし箆に 残れるは「花や 今宵」の歌

一番の歌詞は、熊谷直実が平敦盛を討ち取った時のことが題材だ、二番の歌詞は、歌人としても優れていた、清盛の異母弟・平忠度が題材だ、忠度は、薩摩の守の官位を貰っていたが、これが、無線乗車(只乗り…ただのり)の事を「薩摩の守」ということの語源だ。

そんなことは、さて置き、忠度は平家都落ちの途中で引き返し、和歌の師・藤原俊成の屋敷に赴いて、自分の歌を多数おさめた巻物を託し、「勅撰集に入れるのにふさわしい歌がございましたなら、たとえ一首でも結構ですのでご恩情をこうむって、載せて頂きたい」と懇願した、後に、俊成卿は、この巻物の中から、「故郷の花」という題で詠まれた「さざ波や志賀の都は 荒れにしを 昔ながらの 山桜かな」の一首を選んで載せますが、忠度が今は朝敵となっていることで憚り「読み人知らず(作者不詳)」として載せたのだった。

忠度戦死の時、名を名乗らずに討たれたが、箆(えびら…矢筒)に結びつけていた短冊に書かれていた和歌「行き呉れて 木の下蔭を 宿せば 花や今宵の あるじならまし」から忠度であることが判ったのだそうだ、その辺が、二番の歌詞として書かれている。

「徒然なるままに」は「することもなく、手持無沙汰なのにまかせて」という意味のようだが、それ故か、少し歴史に触れ、無情も知った、矢張り暇なのかな？(笑) (2023年1月記)